

女たちのがらんど

女たちのがらんど

一 『八日目の蟬』

やわらかかった。あたたかかった。つぶれそうにやわらかいの、何か、決してつぶれないごつりとしたたかさがあった。なんてもろい。なんて強い。小さな手が希和子の頬にべたべたと触れた。湿っていて、やっぱりあたたかかった。離しちゃいけない。希和子と思う。私だったら、絶対にこんなところにひとりきりにしない。私がまもる。すべてのくるしいこと、かなしいこと、さみしいこと、不安なこと、こわいこと、つらいことから、私があなをまもる。希和子はもう何も考えられなかった。呪文のように希和子はつぶやき続けた。私がまもる。まもる。まもる。ずっと。

腕のなかで赤ん坊は、あいかわらず希和子に向かって笑いかけていた。茶化すみたいに、なぐさめるみたいに、認めるみたいに、許すみたいに。

希和子は「あの人」の子どもを墮胎した。そして「あの人」の妻は子どもを産んだ。「ただ、見るだけ」「あの人赤ん坊をみるだけ」と、「あの人」との関係を終わりにするために、新しい人生を始めるため

北 出 真紀恵

に忍び込んだ「あの人」の家で、希和子はその子と出会ってしまう。

「私はこの子を知っている。そしてこの子も私を知っている。」

こうして、『八日目の蟬』の物語は始まる。

角田光代『八日目の蟬』は、二〇〇五年から二〇〇六年にかけて『読売新聞』に連載され、二〇〇七年に単行本化、二〇一〇年にテレビドラマ化され、二〇一一年には文庫化、そして映画化され、多くの読者や視聴者を獲得した。

知られるように角田光代は、女性の生き方が多様化する現代社会で女たちがかかえる疎外感や、近代家族制度のなかの家族の問題を、特に母娘の関係を主軸にくり返し描いて来た作家である。彼女が書く物語は、女たちの「関係」の濃密な物語である。

『八日目の蟬』も例にもれず、女たちが紡ぎ出す「関係」への希求の物語である。作家本人が「女性を書きたい」「三十代、四十代とそれぞれの年代の女性たちと時代との関係を書いていきたい」(角田・大澤、二〇一〇)と述べているように、角田はあくまでも「女」にこだわりをみせる。そして角田は「私の小説は、想定読者もテーマも狭く、「母性」というテーマは排他的だし、読み手を限定するところがあるのに『八日目の蟬』が「なぜ売れるのかわからない」と疑問を呈している。

『八日目の蟬』は、不倫相手の子どもを誘拐して逃走する女と、その誘拐犯の女に愛されて育てられる娘という特殊な設定で語られる。本小稿では、本作がなぜ多くの人に共感をもたらしたかを考えてみたい。

以下の順で議論を行う。まず、『八日目の蟬』では象徴的に使われ、角田作品に時おり顔をみせる「がらんどろ」について、斎藤環（二〇一一）に依拠しつつ、「がらんどろ」とは何かを整理してみたい（第二節）。次に、第一章の語り手・希和子の「がらんどろ」、そして主人公である第二章の語り手・恵理菜（薫）の「がらんどろ」について検討を行い（第三節）、最後に女たちの「がらんどろ」からの救済について、また、タイトルにも使われた「八日目」について、ささやかな考察を加えてみたい（第四節）。

蟬は地上に出て七日目で死ぬ。蟬にとっての「八日目」とは、存在しない時間である。希和子にとっての「八日目」とは、子どもを誘拐したその時から始まる逃亡の三年半であり、恵理菜の「八日目」とは、希和子に誘拐され逃亡していた時間ではなく、誘拐犯から解放された後の人生である。

私たちは、「八日目」の時間のその先に、いったい何を見ることができのだろうか。

二 がらんどろの女

あんななんか、空っぽのがらんどろじゃないの。電話の向こうで、あの女が言った言葉だ。あなた、自分の子どもを殺したんでしょ。信じられない。あんなが空っぽのがらんどろになったのはその罰じゃないの。殺された子どもが怒ってんだよ。ざまあみろ。

不倫相手の妻・恵津子の容赦ない言葉に、希和子は深く傷つく。が

女たちのがらんどろ

らんどろは子どもがいなくなった子宮であるとも考えられるが、何もかもを失い、何も生み出さない空虚な存在であることもイメージさせる。誘拐犯・希和子は子どもを産むことが出来なかった。そして、これからも産むことが出来ない。

斎藤環（二〇一一）は、がらんどろは『八日目の蟬』のみならず、角田作品においてしばしば登場することを指摘している。そして、がらんどろは女のなかにあるのだと述べる。「それはもちろん、ただの『がらんどろ』ではない。つまり、たんなる欠如ではない。がらんどろは女を動かす。がらんどろは女をどこかへ連れていく。がらんどろゆえに女はどうしようもない男を受け入れ、がらんどろが共鳴するふたりの女は引きつけ合う」のだと。がらんどろはひとつではない。女の数だけががらんどろがある。そして、がらんどろは女の何かを駆動させるものであるのだ。

がらんどろについて、斎藤（二〇〇九b）（二〇一一）に依拠しつつ、詳しくみていくことにしよう。

（一） がらんどろの起源

がらんどろはどこからやってくるのだろうか。

斎藤（二〇一一）は、それは母と娘の関係において胚胎するものであるとの仮説をたてている。斎藤の説明は次のようなものだ。母娘関係は、母による娘の支配という形式をとりがちである。母による娘の支配は「身体的な同一化」ゆえの「共感にもとづく息が詰まるような密着関係」であると同時に「葛藤の温床」ともなりうる可能性のある複雑なものである。母の娘への支配の端緒は「しつけ」である。それは息子への場合とは異なり、最初から徹底して身体の内えになされる。「しつけ」は何らかの価値規範に基づいてなされるというよりは母親が自分にされたことを反復するという形式をとり、それは他人に気に

わたちのがらんど

入られる身体の獲得をめざすものである。また、その支配は高圧的な命令によってではなく、献身的なまでの奉仕によってなされ、そこでの母親の支配原理を簡略化するならば「自分の欲望は放棄して他者の欲望を惹き付けよ」というものである。こうして娘は「おしとやか」で「可愛い」女性という「女性らしさ」の分裂を引き受けることになる。(斎藤、二〇〇九b:二二三―二二七)

「女性らしさ」は首尾一貫した観念たりえない。この根本的に矛盾と分裂を含みこむ「女性らしさ」の教育は、矛盾を含んだイメージとして、同一化による支配によってしか伝えようがない。この分裂こそが、女に特有の身体感覚、がらんどにつなげていくという。

母の愛情という名のもとに「本質」のない幻想の「身体性」である「女性らしさ」が母から娘へと受け継がれる。同性であるがゆえに娘は母親を移す鏡となり、自己愛投影の対象となり、アイデンティティの混同をまねきやすい。身体的同一性ゆえの親密性は母娘関係においてのみ成立する。なぜならがらんどをもっているのは女だけだからである。母親の身体性は言葉の回路を通じて娘へと伝達される。そして、斎藤(二〇〇九b)はすべての娘たちの身体には、母親の言葉がインストールされ、埋め込まれているのであり、どんなに母親を否定し、反発しようとも、娘たちは与えられた母親の言葉を生きるほかはないことを指摘した。そして、これこそが「父殺し」とは違って「母殺し」が不可能な理由なのである。(斎藤、二〇〇九b:二二三―二二七)

母親の支配を拒めば、母親の献身に対する罪悪感と孤立感が生じる結果となり、「母親による娘の支配」はそれに抵抗しても従っても、がらんどをもたらずにはいられない。こうして、すべての「娘」はがらんどをかかえることになる。

(二) 欲望の二大原理 「所有原理」と「関係原理」

斎藤(二〇一一)はまた、この「わたちを動かしてやまない何ものか」であるがらんどは、男には理解できないと述べている。なぜなら、このがらんどはわたちに「関係原理」を与えるものであり、ファルス(ペニス)の論理、すなわち「所有原理」で動く男たちには理解できないのは当然のことであるというのだ。

ここで、欲望の二大原理である「所有原理」と「関係原理」についてみておきたい。

斎藤(二〇〇九b)によれば、ジェンダー間の欲望の違いは、およそ次の通りである。精神分析において、男性の所有原理はラカンのいう「ファルスの享楽」を目指して突き進む。ファルスは人間に言葉をもたらず原器的なものであるがゆえに、男の欲望は徹底して言語的・観念的なものとなる。そして、それは単に欲望の対象を持ちたいと願うことばかりを意味しない。対象を視覚化し、言語化し、さらに概念化してこれを意のままに操作しようとする過程すべてが、本質的な「所有」の身振りであるという。いっぽう女の「関係原理」はどこまでもファルスのなものはみ出していく。女は対象を観念として所有しようとせず、対象をまるごと受け入れる。関係への欲望は、本質的に受動的なものであり、まず対象をまるごと受け入れた後で、女は自らの欲望を発見する。しかし、女は受け入れることで十分な満足を得られているので欲望の対象を今さら言語化したり概念化したりしようと思わない。対象をまるごと受け入れ「関係」を紡ぐことで、がらんどは満たされていくのだ。(斎藤、二〇〇九b:二〇四―二〇九)

また、斎藤(二〇〇九b)は男女の性愛の形式の違いを「所有原理」と「関係原理」で説明している。男は性愛を所有原理でとらえ、女は関係の原理でとらえようとする。女にとって性愛関係とは「まさにあらゆる感情の器」にはかならず、「一度に一人」が原則となる。新しい恋人ができるたびに、過去の男は消去され、新たな関係が「上書き」

されていく。性愛における価値規範は、「所有原理」と「関係原理」を前提としており、「ジェンダー」と「性愛の価値規範」とが互いに補強しあうような循環関係におかれている。男女関係の究極を「性行為」ととらえるのは「所有原理」であり、男の性愛関係はそこでひとつのピークを向かえるが、女にとって性行為は「関係性」のはじまりにすぎない。(斎藤、二〇〇九b:一六六―一七二)

ラカンという。「性関係は存在しない」と。(Lacan, 1972-1973) 愛し合う男女が求めあって結ばれたとしても、その結合は「本当の結合」ではない。それぞれが互いに抱きしめているのは、現実の相手そのものではなく、相手に投影された欲望がもたらした幻想にすぎない。つまり、男と女は、本当の意味で「関係」を持つことができない。

女たちは空虚さを、憂鬱さを、倦怠を、孤独を、男よりずっと強く感じている。こうした感情は女性の「関係原理」の根本にある。この空虚は関係における分裂に由来するために、それを男たちのように「所有」で埋めることはできない。空虚を埋め、あるいはごまかしてくれるのは、他人との親密な関係性のみである。(斎藤、二〇〇九b:二二七―二二九)

そして、女がらんだうは、「所有」ではなく他人との関係性でしか埋めることはできない。

ラカンに従うならば、女が女になっていくのは、異性愛主義を基盤においた欲望のシステムのなかにある。そして私たちの欲望とジェンダーは、互いに補強しあう循環的關係にある。しかしながら、「性関係は存在しない」。つまり、異性愛のジェンダー秩序のなかで穿たれた女がらんだうは、男で埋めることはできない。

三 女たちのがらんだう

本節では、『八日目の蟬』の女たちがかかえるがらんだうについて女たちのがらんだう

「関係」への欲望を糸口に考えていきたい。

(一) 希和子のがらんだう

『八日目の蟬』は第一章と第二章の二部構成になっており、物語の前半は、希和子の語りによって進行していく。物語における長いプロローグに位置する。

第一章の舞台は一九八五年である。希和子は勤め先の上司である秋山と交際し、妊娠するが、相手に説得され墮胎する。うそつきで不誠実な秋山と別れることがなぜ出来ない。ある日、希和子は秋山の子どもを衝動的に誘拐してしまう。自らが産むはずだった子どもとして、その娘に「薫」と名付け、逃げて、逃げて、たどりついた男子禁制であるコミュニケーション「エンジェルホーム」で、そして、そこからさらに逃げた小豆島で、希和子は薫をわが子のように愛し、育てていく。希和子のがらんだうは薫をまるごと受け入れ、薫を愛する。

第一章は、逃げ続けながらも薫と一日でも長く一緒にいたいと願う、薫に愛を与え、慈しむ希和子の日々が描かれる。

ここでは、第一章の語り手である希和子の「がらんだう」について検討を行いたい。物語においては、希和子と秋山の恋愛についてはほとんど語られておらず、物語は「誘拐」から始まり、「逃亡」へと進む。希和子は、物語の最初からがらんだうの女であった。

本節では子どもをさらって逃げる行為へと希和子を駆り立てたがらんだうについて焦点をあててみたい。

希和子を「誘拐」へとかりたてたものの、それはまぎれもなく「がらんだう」であった。それは、秋山の妻・恵津子が投げつけた言葉からも明らかである。「あんたなんか空っぽのがらんだうじゃないの。」希和子は秋山の子を墮胎している。「がらんだう」は「子どもがいなくなった子宮」を示唆するが、希和子にとってのそれは、「本当は産み

女たちのがらんど

たかった子どもとの未来」であり、秋山との未来でもあった。恵津子の感情的な言葉は希和子には許せないものであり、「がらんど」は希和子を動かす、そして、彼方へと連れて行く。

希和子のそもそものがらんどは、秋山との「関係」の不全にある。秋山は「所有原理」で動く男である。だからこそ、恵津子との家庭を「所有」したうえで希和子との関係も「所有」していたいと願う。そもそも秋山には女の「関係」への欲望が理解できない。

がらんどは女のなかにある。そして、それは、女の何かを駆動させる。がらんどを埋めてくれるのは他人との親密な関係性であるとするならば、その対象を「所有原理」で動く男に求めるべきではないことは明らかである。しかしながら、がらんどはどうしようもない男を受け入れてしまう。なぜなら、女にはがらんどがあるからだ。がらんどを埋めるために必要な「関係性」への希求。しかし、その愛の対象を「所有原理」で動く男に求めたとき、異性愛の形式の中では、女たちはさらに引き裂かれることになる。また不倫という形式は「関係」をますます不安定なものへと駆り立てる。

希和子は引き裂かれる。別れようとする。だが、希和子のなかのがらんどは、誰かにすがろうとする。戻ってしまう。

はっきりと大きくなったがらんどは、「その子」と出会ってしまった。希和子にとって「関係」の対象が「娘」であること、それはこの物語においては必然であった。なぜなら、希和子のがらんどを埋めるのにふさわしい対象は、娘以上にはないからである。

水無田気流（二〇一一）は「希和子が薫を初めて見たとき、その泣き声に『自分の内側から発しているような』同化の吸引力を感じたのも、異性愛よりも無限に増殖する自『の分身こそが愛おしい』のであって、それは母性本能などというわかりやすいものではなく、女にとって最高のエロスであると論じている。それは「母性を描いているようにいて、母性（と信じられてきたもの）を制度から引きはがす行為」

であり、この物語は「母性という一見わかりやすい回路を通じて、自らの手に家族制度にも男性にもよらない、エロスの対象をとり戻す行為」を描いたものののだ。

希和子にとっての薫との三年半は、薫をうけとめ、薫を愛し、慈しみ、薫との「関係」を積み重ね、濃密にしていく、喜びに満ちた「関係」への希求の時間であり、それは希和子が果たしうる最高のエロスであったのだ。

（二） 恵理菜（薫）のがらんど

「でもね、大人になってからこう思うようになった。ほかのどの蟬も七日で死ぬって死んじゃうんだったら、べつにかなしくなかって。だってみんな同じなんだもん。なんでこんなに早く死ななきゃいけないんだって疑うこともないじゃない。でも、もし、七日で死ぬって決まってるのに死ななかった蟬がいたとしたら、仲間みんな死んじゃったのに自分だけ生き残っちゃったとしたら」三分の一ほど残ったビールを足元に流す。液体はかすかな音をたてて土にしみこんでいく。「そのほうがかなしいよね。」

第二章の語り手は恵理菜（薫）である。『八日目の蟬』の主人公は恵理菜であり、『八日目の蟬』の物語はまぎれもなく恵理菜の回心の物語である。

誘拐された子ども・薫は秋山夫妻によって恵理菜という名前に戻された。事件から十七年がたった二〇〇〇年代に舞台は移り、恵理菜は大学生になった。

続いて、恵理菜のがらんどに焦点をあてていきたい。

物語のタイトル『八日目の蟬』の意味は、第二章において語られる。「八日目」という比喩は、恵理菜にとっては、人生が蟬にとっての

「八日目」のようなものであることを指す。あつてはならない時間である「八日目」が、恵理菜にとっては、犯罪に巻き込まれ、逃亡している時間を指すのではなく、誘拐犯から解放された後の人生であるという困難が彼女のがらんだ根元にある。

大澤真幸（二〇一一）は恵理菜の不幸が、それ自体大きな不幸や悲惨な体験を経験していないことにありと述べている。恵理菜にとって人生全体を受け入れ可能なものにするような愛の体験―人生全体の礎となるような愛の体験―は希和子との母子関係であるが、恵理菜が家族を愛せず、家族が恵理菜を愛せない原因はすべてこの体験のせいであつて、このねじれた関係こそが恵理菜のがらんだ他にない。

恵理菜の「八日目」は不遇なものである。特に母親・恵津子との関係はうまく立ちゆかない。娘を愛そうとすればするほど、恵理菜に希和子との生活の痕跡をみて、エキセントリックにねじれていく母親と、恵理菜はどうしても「関係」を紡ぐことができない。恵津子もまた、がらんだ女である。

恵理菜が自らの過去、事件のことを客観的に理解できたのは、小学校五年になったとき、初めて出来た友だちによつてであつた。聡美ちゃんの家で開かれた誕生日パーティで、母親の手作りのおやつや、父親が作る聡美ちゃんの成長記録のビデオを見ながら、恵理菜は恵理菜の家族が「ふつう」ではないことを唐突に理解する。もし、「あの女」がいなかったら、両親から「ふつう」に愛され、「ふつう」の家族でいられたのかもしれない。恵理菜は恵理菜から「ふつう」を取り上げてしまった「あの女」を憎み恨むことで世界を理解するようになる。

また「誘拐された子ども」であつた恵理菜への好奇のまなざしは、恵理菜を孤独においやる。「ともだちがでな」かつたり「体育の時間にだれも組んでくれな」かつたり。そんなことのくり返しだ。恵理菜は、あの事件を知らない、ここではない場所に自分を連れて行くのは自分しかない、と家族との「関係」に欲望することをあきらめるよ

女たちのがらんだ

うになる。あらゆる「関係」から逃げることで恵理菜は自らを守ろうとする。

恵理菜のがらんだのは、岸田さん呼び寄せる。

岸田さんは、アルバイト先で知り合った恵理菜の交際相手である。岸田さんには妻子があり、恵理菜とは不倫の関係である。恵理菜はここに、希和子との行為の反復を見ずにはいられない。中学生だった恵理菜が事件に関する本を読んだ時には「取り合うような魅力のある人には思えないし、女にだらしない、なんにも決められないクズみたいな男の人を二人の女は見限らなかつたなかつたのだらう」と思ったが、今の恵理菜にはなんとなくそれがわかつてしまう。全部はわからないが、「ただひとつだけ、嘘ばかりつく、女にだらしない、なんにも決められない人でも、好きになつてしまうこともある」ということを今はわかつている。そして恵理菜は、なぜ岸田さんのことを好きになつたのかを覚えていて。それは岸田さんが恵理菜に言つた言葉だ。「自分が悪くないときは謝らなくていいんだよ。」恵理菜は岸田さんの言葉を反芻する。「謝らなくていい。きみはたくましく生きていく。その言葉を胸の内にくりかえしていれば、私はずっと遠く、いきたいと望んだ場所にきちんといくことが信じていける」と、恵理菜は思う。恵理菜はこの世界でただひとり、恵理菜を受容してくれるように思える岸田さんとの「関係」のようなものに、岸田さんの言葉に一瞬でも救われるような気がするのだ。

岸田さんの子どもを妊娠した恵理菜は、岸田さんに別れを告げる。岸田さんは誕生日を祝ってくれたり、花火大会に連れて行ってくれたり、クリスマスには部屋の飾り付けをして、小さなパーティを開いてくれたり、新年には一番にメールをくれたり、桜を見に連れて行ってくれた。だれかと食卓を囲む楽しさを教えてくれたり、大好きだといつてくれた。人を好きになるということを教えてくれた。会いたいと願う気持ちを教えてくれた岸田さんと、恵理菜は別れようとする。なぜ

わたちのがらんど

なら、恵理菜は「もうひとりではないから。ひとりぼっちでは、もうないから」である。「会わなくなるなんて絶対にできない」と思っていた岸田さんと、これからは会わないと決める。子どもがいるという実感が、恵理菜にひとりではないという自信をもたらす。恵理菜は岸田さんと終わろうとする。恵理菜のがらんどは、もう岸田さんを必要とはしない。そもそも、恵理菜のがらんどは、岸田さんとの「関係」のようなもので埋まるものではない。

そして、恵理菜の「八日目」が動き出す。

泣く母、動けない父、うつむく妹を見て、私はひどく冷静な気持ちで思う。ああ、そっか、そうだね。なんで私だったのか。それを抱えて過ごして来たのは私だけではなかったんだ。なんで私が事件に巻き込まれたのかと、ずっとそう思っていた。でも本当の問いはそうじゃない。なんで私が私だったのか。なんで「私」を引き受けることになってしまったのか。父も母も、妹もきつとずっとそう思ってきたんだ。なぜ父親になんかあったのか。なぜ母親になんかあったのか。なぜおれは帰ってきた娘から目を逸らすのか。なぜ私はこの子に自分の不安定を見せてしまうのか。なぜおれはすべてに背を向けてしまうのか。なぜ私はすぐ逃げ出してしまうのか。なぜ私には突然姉ができたのか。なぜ私はこの家の子だったのか。なぜ私はこんなふうにしかなないのか。父らしからぬ父、母らしいことのできない母、いつも気をつかっていた妹、そしてすべてを憎むことで自分を守ってきた私。「こんなはずではなかった」と思う場所から、一歩も踏み出せなかった私たち。好きや嫌いではなく、私たちがどうしようもなく家族であったことに、私は今気づく。

すべてを憎むことで「八日目」を生きていた恵理菜は気づく。がら

んどは、自分だけが抱えているのではないことを。恵理菜にとって、「八日目」を生きることはただ「かなしい」ことであった。岸田さんを好きになった。岸田さんに会いたかった。終わることなんてできないと思っていたが、妊娠し「私はひとりではない」と思えたその時から、恵理菜は強くなる。現在の自分を不幸においやった希和子との「行為の反復」に何かしら運命のようなものを感じながら、恵理菜はその反復を転倒しようとする。

八〇年代において、希和子には果たすことができなかった「婚外子」を産み、育てる」という決断を、恵理菜が生きる二〇〇〇年代のジェンダー秩序は可能にする。現代を生きる女たちにとって、意思さえあれば、それは実現可能なことである。

そして、恵理菜は気づく。ここではない場所に向かうためには、自分の足で歩くしかないことに。自分だけががらんどではなかったことに気づき、同じがらんどを抱えているということで、何とか誰かとつながっていかうとする。

恵理菜のがらんどを駆動させたのは、恵理菜に宿った彼女の未来の子どもである。

そして、物語は「八日目」のその先へと向かう。

四 がらんどからの救済、「八日目」のその先へ

「前に死ねなかった蟬の話をしたの、あんた覚えてる？ 七日で死ぬよりも八日目に生き残った蟬の方がかなしいって、あんたは言ったよね。私もずっとそう思ってたけど」千草は静かに言葉をつなぐ。「それは違うかもね。八日目の蟬はほかの蟬には見られなかったものをみられるんだから。見たくないって思うかもしれないけれど、でも、ずっと目を閉じてなくちゃいけないほどにひどいものばかりでもない、私は思うよ。」

私たちのコミュニケーション・エンジェルホームで一緒だったというフリーライターと千草とともに、恵理菜はエンジェルホームから逃げた次の、最後の潜伏先・小豆島に向かう。そして、恵理菜は思い出す。

橙の夕日、鏡のような銀の海、丸みを帯びた緑の島、田んぼの緑に咲く真っ赤な花、風に揺れる白い葉、醤油の甘いにつかしいにおい、友だちと競争して遊んだしじ垣の崩れかけた塀、望んで手に入れたわけではない色とにおいが、疎ましくて記憶の底に押しこんだ光景が、土砂降りの雨みたいに私を浸す。薫。私を呼ぶ声が聞こえる。薫、だいじょうぶよ、こわくない。

エピソードでは、私たちのがらんどからの救済が描かれる。恵理菜が「八日目」のその先にみたもの、それは何だったのだろうか。

大澤真幸（二〇一〇）は、この「八日目」のような時間を「物語化できない生」と呼ぶ。物語というのは価値ある終結（目的）へと関連づけられている出来事の連なりであって、幸せに向かっていて、あるいは、価値あることをやっているという思うことができるならば、それは物語化された人生と言えるのであるが、「八日目」は、人生の物語の中に位置づけをもたない時間の比喩である。大澤はまた、『八日目の蟬』が多くの読者の心をつかんだ理由として、こうした「人生の物語化の不可能性、あるいは物語化の困難が、現代社会に置いて、非常に広く、多くの人に共有されているから」と述べている。

憎みたくなかったんだ。私はじめてそう思う。本当に、私は、何をも憎みたくなかったんだ。あの女も、父も母も、自分自身の過去も。憎むことは私を楽にはしたが、狭く窮屈な場所に閉じ込めた。憎めば憎むほど、その場所はどうも私

私たちのがらんど

を圧迫した。

恵理菜は自分の過去を受容する。希和子から愛され、希和子を愛したことを、そして、逃亡の三年半が至福の時間であったことを。

「八日目」を「八日目」として受け入れること、それは、物語の消滅という現実になすすぐ向かい合うことでもある。

希和子に愛され、自分も希和子を愛したことを直視したことで、恵理菜は子どもを産み、育てる決断をする。

そう、だいじょうぶ。なんの心配もいらない。子どもが生まれたら立川の実家に帰ろう。母親になれなかった母と、どんな人を母とのか知らない私とで、生まれてくる赤ん坊を育てよう。父であることからつねに逃げ出したかった父に、父親のように赤ん坊をかわいがってもらおう。もし両親が役にたたなくても、私がかため母でも、千草がいる。真理菜がいる。そうしたら私は働くことができる。働いて、赤ん坊にかわいい服を着せて、おいしいものを食べさせて、なんの心配もいらないんだということをお教えあげよう。あの人ー岸田さんに会いたくなったら、生まれた子どもを強く強く抱きしめよう。岸田さんが私にそうしてくれたように、世界でいちばん好きだと赤ん坊の耳に幾度でもささやこう。そうしたら私は岸田さんを憎まなくてもすむだろう。きっとだいじょうぶ。

恵理菜のがらんどからの救済は、自分の過去、現在を受け止めることによって、すべての憎しみから解放されることであることが示唆される。あらゆる「関係」を拒否することで自らを守り、その場所から一歩も進むことができなかった恵理菜であったが、希和子から愛され、希和子を愛した時間、その「関係」の記憶が、「八日目」のその

女たちのがらんどう

先へ向かう契機となる。惠理菜は、希和子との「関係」の記憶を頼りに新たな「関係」を始めようとする。遠い日の「関係」の記憶は、惠理菜を「女性的なるもの」「母」へと変換していく。

『八日目の蟬』に多くの読者が共感したものの、それは、大澤（二〇一〇）が述べるように、蟬の「八日目」のように「物語化できない生」を生きていることが、現代社会のなかで広く共有されていることにある。主人公・惠理菜の「八日目」のその先を生きていこうとする姿、誰かとつながってゆこうとする姿に、私たちは希望を見いださずにはいられない。そして、この物語に深みを与えているのは、希和子の薫（惠理菜）に対するあふれるほどの愛情であることはいうまでもない。

愚かな私が与えてしまった苦しみからどうか抜け出していますように。どうかあなたの日々がいつも光に満ちあふれていますように。薫。

なぜだろう。人を憎み大それたことをしでかし、人の善意にすがり、それを平気で裏切り、逃げて、逃げて、そうするうち何もかも失ったがらんどうなのに、この手のなかにまだ何か持っているような気がするのにはなぜだろう。いけないと思いつながら赤ん坊を抱き上げたとき、手に広がつたあたかさとやわらかさと、ずんとする重さ、とうに失ったものが、まだこの手に残っているような気がするのにはなぜなんだろう。

希和子のがらんどうからの救済は、今もなお薫（惠理菜）を愛することではない。私たちは欲望する、このような濃密な愛を。しかし、私たちは忘れてはならない。母から娘への愛情はこれ以上ない自己愛の投影であることを。対象を認め、なぐさめ、許し、まるごと受容していく海のように、希和子は薫の幸せを願い、薫を愛し続ける。それ

は、希和子自身にとってのがらんどうからの救済であり、八日目を生きていく希望でもあるからである。

物語の終盤、二人は出会う。しかしながら、気づくことはない。そして、エンディングの海の場面は、切ないほどに美しい。

海は陽射しを受けて、海面をちかちかと瞬かせている。茶化すみたいに、認めるみたいに、なぐさめるみたいに、許すみたいに、海面で光は踊っている。

愛された記憶をつないでいく。誰かを愛すること、誰かに愛されること。「関係」を紡いでいくこと。不安定で不確実な時代に生きるからこそ、私たちは「関係」を希求せずにはいられない。

愛された記憶を失っていた惠理菜が「愛された記憶」をとりもどしたとき、彼女はどのように他者を愛してゆけるのだろうか。

「母」になり、「子ども」を愛すること、それは惠理菜にとって、「ここではない場所」から踏み出す契機であり、八日目を生きていく希望である。

女たちのがらんどうは母から娘へと語り継がれ、そして、女たちの愛は再生産されていく。

〈参考文献〉

大澤真幸（二〇一〇）『八日目の神（の不在）』大澤真幸『THINKING』〇七号「人生という物語」の呪縛から逃れて』左右社。

大澤真幸・角田光代（二〇一〇）『対談 欠損していく愛を取り返してくるもの』大澤真幸『THINKING』〇七号「人生という物語」の呪縛から逃れて』左右社。

斎藤環（二〇〇九 a）『関係の化学としての文学』新潮社。

斎藤環（二〇〇九 b）『関係する女 所有する男』講談社現代新書。

斎藤環 (二〇一一) 『母と女とがらんどろ』『ユリイカ詩と批評』5 特集
角田光代 明日へ向かって歩くのだ』青土社。

水無田気流 (二〇一一) 『つながり』のダークサイド』『ユリイカ詩
と批評』5 特集 角田光代 明日へ向かって歩くのだ』青土社。

Lacan, Jacques. *The Seminar of Jacques Lacan: Book XX, Encore 1972-1973*. 1975. Trans. Bruce Fink. Norton: New York, 1998.

〔付記〕

本稿における引用は、角田光代『八日目の蟬』(二〇〇七) 中央公論
新社Ⅱ (二〇一一) 中公文庫を底本としている。

〔註〕

(1) 『対岸の彼女』(二〇〇四) 文藝春秋Ⅱ (二〇〇七) 文春文庫で
は専業主婦とキャリアウーマンという立場を超えた女同士の友愛が
描かれた。第一三二回直木賞を受賞。母親との葛藤を描いたものに
『ロック母』(二〇〇七) 講談社Ⅱ (二〇一〇) 講談社文庫、『マザ
コン』(二〇〇七) 集英社 (二〇一〇) 集英社文庫などがある。

(2) 本稿では「所有原理」と「関係原理」についての説明は最小
限にとどめることにしたい。特に「関係」についての記述は(斎藤、
二〇〇九a)に詳しい。

(3) 斎藤 (二〇〇九b) においては、個人の欲望は「所有」と「関
係」という両極のどこかに位置づけられるのであって、個人が複数
の形式を持っていてもよいのであり、一般には生物としての男は
「所有原理」で活動し、女は「関係原理」で動く傾向があるという
ことを強調している。圧倒的なまでに「所有者」が支配するこの世
界で、いかに「関係者」の存在を認識していくかという問題は、ジェ
ンダーセンシティブであろうとする態度から導かれた問いかけであ
ると述べている。

わたちのがらんどろ

(4) 八十年代後半、男女雇用機会均等法の施行によって女性の生き
方は多様化したようにみえたが、実際には女性たちを分断していく
新たなジェンダー秩序再構築の契機でもあった。また、家族や地縁
のない人たちが新新宗教に集った時代でもある。物語の設定には実
際におこった事件が下敷きにされている。ひとつは九三年の「日野
〇し不倫放火事件」。もうひとつは七九年から八十年におこった
「千石イエス事件」である。

(5) テレビドラマ化にあたって、浅野妙子の脚本は希和子を中心に
テーマを一本化している。人は愛されることによって、愛すること
によって生きてゆけるという主題で制作され、高い評価を受けた。

(本学人文学部准教授)